

問題一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

『平家物語』^(注)は、その各段の標題から見ただけで規模・多様性・展開度・成熟度などの点で格別に大きくかつ高くさえある事が分る。『保元物語』^(注)の方にはそういうものを示すような標題は唯の^{ただ}一つもない。ここにわざわざ引くことはしない。一目すれば分る事だからである。それらは平凡極まりないと言ってよい。かくて『保元物語』は——再び言うが——すべての点で『平家』のごときと較べて段違いに小さい作品である。しかし、しかしそのことは『保元物語』の劇的性格をいささかも否定するものではない。試みに『平治物語』^(注)と比較して見ればそのことはすぐ分る筈である。『平治』において感じ取ることの出来ない劇的テーマを人は『保元』において感ずることが出来る。『保元』と較べれば『平治』は物語の主題においてすでにドラマの資格を失っている、とさえ言うてよいであろう。さらに一步を進めて言えば、あれ程多様な山場を持つ『平家物語』においてすら感ずることの出来ない特別の種類の鋭い劇的性質を『保元物語』は持っている。それは小さい作品であるが故に一層鋭く現われる。物語として豊かでないだけになおのことその所が端的に現われている。もしそれがなかったなら「平家の物語世界」はありえなかったであろうような、そういう切り裂くような性質のドラマが『保元物語』にはある。またしても繰り返す言う。個々の場面や人間描写などにおいてではなく主題としてそれがあるのだ。

『保元』の主題におけるその劇的なるものは何か。古代宮廷の質的顛落をセンレツな対照性をもって表現し切っていることであり、宮廷に代って「無頼」の流れ者が独立不羈の英雄としてしかも滑稽さを兼ね備えて登場したことであり、「公卿僉議」の場において身分の低い「末座の入道」が断乎たる決定者として立ち現われたことであり、そうして遂に、顛落した宮廷からは神聖王とは逆の「大魔王」が出現するに至ったことである。それは一本の太く鋭い逆転劇の筋であった。

宮廷の権威失墜や無頼の英雄の活躍などは、それ自体としては、『平家物語』になるともう当然自明の事とされている。そういう点に関して『平家』で問題になるのは、どのような無頼の英雄がどのように動くかであり、誰が誰に対してどのようなものであるのかであり、宮廷の権威失墜もどのような場面でどのようにそれが現われているかであり、そうだからこそ複雑な具体性を帯びた諸

関係が主題となつて展開されるのであつた。そこでは、無頼の英雄の活躍も宮廷の失墜よりも「平家興亡史劇」の中で一つの役をふり当てられた函数^一としてだけ現われる。壮大豊富で成熟度の高いドラマはそうなつてはじめて可能であつた。その背後にはむろん動乱自体の性質、その規模と深さが横たわつていよう。しかし表現された物語の次元においてその特徴を把^とえることが必要である限り、今簡単に見た点を見逃すことは出来ないであろう。そうして、『平家物語』のそういう構造的特徴が出て来るためには、『保元物語』における端的で鋭い「劇的な突破」が前提として存在していなければならなかつた。無頼の英雄の活躍や宮廷の失墜ぶりが「関係」や「状況」の一項目と成り変わるためには、当然、宮廷の失墜と無頼の英雄の「誕生」がその前提として理論上「先行」していなければならぬ。その「誕生」が劇的な形で『保元物語』にケツシヨウ^Bされていたのである。その意味で、『保元物語』は、物語の次元において、『平家』と一繋がり^{ひつな}をなし、「平家の世界」に対してそれを切り開いた独立序章となつてゐる、と言つてよいであろう。

その点で『平治物語』が物語としては必ずしも不可欠の必然性を持つてゐるとは言えないで、言つて見れば実際の歴史的事件の継起の順序に物語世界のシリーズを合わせるためのつなぎとして卜書きの意味合いを持つに過ぎないのと対照的に異なつてゐる。といふことはしかし、『平治物語』の存在が物語として全く無意味だといふことではない。その物語は確かに平凡でありチンプである。けれどもその平凡チンプな物語が歴史的事件の継起に合せてわざわざ作られて『保元』と『平家』の間に挿入された事それ自体が一つのことを示唆してゐる——と私には思われる。何が示唆されてゐるのか。『保元』・『平治』・『平家』という一連の物語シリーズは、昔から普通、「戦記文学」とか「軍記物」とか呼ばれ、ある時期からやつと「叙事文学」という学術用語がそれに追加されて両者混用のままに呼び慣らわされて来ているけれども、何よりも先ず^まそれらは物語形式をとつた「史劇」であるといふこと、その事を今挙げたちよつとした事実は示唆してゐないであろうか。「史劇」のシリーズであれば、保元の乱を素材にし源平争乱・源氏政権の誕生を素材にする以上、平治の乱を材料にする物語を抜くわけにはいかないであろう。それらの争乱が一連の歴史的事件であるからには、いかに『平治』が物語として「中間的」な性質、つまり未熟で迫力を欠くものであろうとも、「史劇」のシリーズ性を満たすためにはやむをえない存在であつたらう。そうして、それらの物語が「史劇」であるからには叙事的作品でなければならぬことは言うまでもない。とすれば、それらの作品を読む場合に、片々たる形容詞句の持つ情緒だけで作品全体を性格づけてしまふのは一面的

過ぎる、ということになるうし、また単なる「戦記」の部分にだけ注目して議論するのもシヤ^D狭^き窄^{よう}だ、ということになるう。形容部分の情緒性も合戦記の活劇性も、「史劇」としての全体の基本的骨格との関連で批評的に扱えられなければならないであろう。それらの情緒や活劇はその骨格の肉付けとしてまた衣装として陰^{いん}蔽^{ぺい}的に働いている場合もあれば適切な表現となっている場合もあるだろうからである。

というわけで、『保元物語』は中世精神の成立を表現している、一連の物語形式における「史劇」の世界の「突破口」として又「離陸点」として、まさにそのホ^Eッタンをなすものであった。むろん作品の成立年代の先後関係についてそう言っているのではない。その内容の構造的特徴を今は問題にしているのである。とすれば、『保元物語』の考察に当たって、先ず、その基本的骨格をなしているいくつかの構成的主題の意味する所を解き明かす事から始めるのが、物を読む際の本筋というべきであろう。それなしには読むに堪える物語として存立できないであろうような支柱が何であるか、それを明らかにする事が構造を問題にする態度に他ならない、と思うからである。

——藤田省三『精神史的考察』

(注) 『平家物語』 平安時代末期、治承四年(西暦一一八〇年)に起こった内乱を描いた物語

(注) 『保元物語』 平安時代後期、保元元年(西暦一一五六年)に起こった内乱を描いた物語

(注) 『平治物語』 平安時代後期、平治元年(西暦一一五九年)に起こった内乱を描いた物語

問い一 傍線部A・B……Eのカタカナで書かれた語を漢字で書きなさい。

問い二 傍線部一「函数」(注 関数に同じ)とはここではどういうことか、簡潔に答えなさい(二〇字以内)。

問い三 筆者の考える、傍線部「史劇」の特徴を述べなさい(五〇字以内)。

問い四 筆者の考える、『保元物語』の意義を文章全体をふまえて述べなさい(五〇字以内)。

問題二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

大凡物必ず主なかる可らざる、木の幹あり、家の主人ある如し。これ無れば立つこと能はず。而して地球上人々一同、一生の主とすべき者、最至重至大とす。其物なんぞや。夫れ天地に弥り、古今を貫き、其道二つ。曰く、善。曰く、悪。而して悪は善に非ざるの名にして、事物の主たるを得ず。猶温素主となつて冷は特に温素の減耗に生ずる如し。温素なければ天地の気、用を為さず。善、主たらざれば、人の道絶滅、所謂バルバリ是也。然る時は又、天地に弥り、古今を貫き、人の主として方向を定むべき者、唯善のみ。国は人を以て立つ、国の国たる所以の本、亦唯善のみ。然り而して、其善を立るは、唯信の厚きにあり。其信を厚くせしめて確然動かざるに至るは、唯政教・法教の二つある而已。蓋し国は人の集りて立つ者なり。故に国の立は人の立による。人は心を以て主領とす。故に人の立は心の立による。心は意識の本体にして、万事に応じ功用極て多端にして混雑迷惑、神経を転倒し易し。

故に其主を確立して方向・目的明白ならざる時は、事物皆狐狸妖怪となり転倒錯乱して禽獸に劣るに至る。主立ち、方向明なるも、之を信ずる厚からざる時は、其主動揺して船の水に漂ひ、木の葉の風に飄る如し。信する厚ければ水火の中も談笑して立べし。此に人あり大病に悩まざる、苟も信ずる所の医ある、死に至るも薬に迷はず、信ぜざる時は朝夕医を換へ、薬を転じ、狼狽死に至る。其治するは僥倖のみ。是医は病時心の主たるを以て、信ぜざる時は益なければ也。欧州諸大戦、名将の外名医を得れば(注) 鬪軍勢を倍するも亦此為めなり。今某処に往んと欲するに、其路を信ぜずんば、東に行んか西に行んか終日門前に立つも一步を進む可らず。苟も目的定り信ずる厚ければ、鈍拙の者に銃を放たしむるも、東に放つ可丸、決して南に転ぜず、況や西に転ずるをや。能く習熟すれば百発百中に至る。

古人の言に心に主あれば動かずと。孔子の民に信なき立すと称し、諸教法の万殊にして皆信を第一とするも此故なり。故に人と

して方向なく、方向あるも信薄き、万事万業何を以て之を世に立てん。且この大本なる者、地球上^いならざるの処、一ならざるの人決して無し。一ならざる無し、故に一ならざる可らず。而して一ならざる時は、人に非ず、国に非ず。一家一ならざる、其家必ず乱る。^三一国一ならざる、其国必ず乱る。

——阪谷素「政教の疑 第一」

(注) 温素 熱源。

(注) 減耗 減ること。

(注) バルバリー 野蛮な状態や行為のこと。

(注) 闔軍 全軍。

(注) 教法 宗教。

(注) 万殊 様々に異なっていること。

問い一 傍線一「猶温素主となつて冷は特に温素の減耗に生ずる如し。」を必要なことばを補つて説明しなさい(五〇字以内)。

問い二 傍線二「欧州諸大戦、名将の外名医を得れば闔軍勢を倍するも亦此為めなり。」とあるが、これはどういうことをたとえたものなのか、説明しなさい(三〇字以内)。

問い三 傍線三「一国一ならざる、其国必ず乱る。」とあるが、なぜそういえるのか、全体の内容をふまえて答えなさい(一〇〇字以内)。

問題三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

行動様式の二つの種類として本能と習慣とを区別したが、人間と他の動物とにおいてこの二者が有している比重は決して同一ではない。人間を一つの極端とし、昆虫類を他の極端とすれば、前者において習慣が恐らく最大の比重を有しておるのに対し、後者においては本能が最も高度の発展を示していると言うことが出来る。すなわち人間がほとんど完全に習慣によって環境にアジャストするのと反対に、昆虫類は本能のみを媒介として環境との間のバランスを確立する。昆虫類の本能は微妙な構造と作用とを有しておるために、その幼虫はこの世界に出生するや否やその親と区別することが困難なほど完成した行動の主体となる。もし児童という名称が、いまだ自己の力と方法とによって環境に適應することが出来ず、適應のためには成人の助力を必要とするものの謂であるならば、昆虫においてははかかる名称を受くべき時期がほとんどないものと言わねばならぬ。昆虫類は何等後天的に学ぶことなくして、しかもよく環境へのアジャストメントを実現するとき行動の主体となることが可能である。そして逆に昆虫類は先天的に有している行動様式以外のものを学習するという側面に関してはほとんど見るべき能力を与えられておらない。昆虫類は出生の時に完成しているのであって、その以後これに何物かを加えることは許されないのである。

他の極端としての人間にあつては本能は著しく粗雑且つ無力な構造を有しておるが故に、人間の幼児は先天的に有している行動様式に従う限りは全く環境に対する適應の道を知ることなく、成人の庇護並びに助力を離れて環境のうちに放置される時は、ほとんど一日も生きることが不可能である。食物を探すことも、歩行することも、危険なものを避けることも、すべて幼児が方法と力を欠いている事柄である。幼児は環境へのアジャストメントに必要な一切の行動様式を出生の後に新しく学ばねばならず、これなくしてはついに生きることが出来ないのである。昆虫類が出生に際して既に所有していたものを獲得するために、人間はその半生を費やさねばならず、またその生涯を献^{さか}げてなおこれに到達し得ないとも言つことが出来る。人間は生きるためにすなわちアジャストメントのために終生学ぶことを避け得ない存在であり、最も永く児童であることを要求されている存在である。昆虫類が完成したものとして生まれるに反して永く未完成なものとしてとどまらねばならぬ人間は、一方においてほとんどすべての行動様

式を学ばねばならぬと共に、他方においてはほとんど無限に学ぶことが出来る。疑いもなく学習の能力すなわち習慣形成の可能性において人間は生物の系列における一つの極端に立っている。(中略)

人間は人間として生まれると言うよりも、人間は個体として生まれ、生まれた後に習慣を学ぶことよって始めて人間に成ると言うべきかも知れぬ。習慣を学んだ人間をパーソナリティと名づけるアメリカの学者に従えば、人間は個体として生まれ、その後の学習を通じてパーソナリティに成ると言うことが出来る。人間は最も永く幼児であるとき生物であると述べたが、ジョン・フィスクがその有名な研究において説いているように、人間は生物のうちにあつて最も永く幼児であるのみならず、「幼児期の絶えざる延長」が承認せられねばならぬ。すなわち人間が幼児である期間は次第に延長せられつつあるのである。精神生活がますます複雑且つ多様になるが故に、人間が環境へのアダプトメントのために学ぶべき事項が漸次増加し、これと比較して先天的なるものの役割が逐次縮小しつつあるとフィスクは考える。昆虫が昔も今も完成したのものとして生まれるのに反し、人間は未完成なものとして、そしてますます未完成なものとして生まれねばならぬ。人間が環境に適應する力と方法とを持つことはますます困難となり、何等かの意味においてこれを獲得すると信ぜられる時期は漸次遅れつつあるものと言うことが出来る。習慣が人間の生活において占める重要性和その増大とは今や明らかであると考えられる。

さきに人間を行動するものとして把握したが、第二にわれわれは人間を習慣の統一体として規定せねばならぬ。人間は具体的に常に習慣をもつて成るものであつて、これを措いて現実の人間を考えることは出来ない。これは特別な思想の問題ではなく、人間は習慣を外にしては一日といえども生きることが出来ぬという意味において動かし難い事実の問題であると共に、人間の世界に固有のものとしてその優越と名誉とを立証するごとく見られる一切の文化もこの習慣の地盤の上のみ発生し發展するを得るものである。デューイが「人間は習慣によつて動くものであつて、理性や本能によつて動くものではない」と言い、ジェイムズが人間を「習慣の束」(bundles of habits)と呼ぶ所以である。人間の内部と外部とに亘つて多くの習慣が結合され統一されているというのが人間の具体的現実的な形態であつて、ある人間が如何なる人間であるかは、彼がその生活において如何なる習慣を学んで身につけたかによつて大体明らかにされると共に、彼がその生活において如何なる苦しみと喜びとを経験するかも習慣形成の如何に基づく

ものと言わねばならぬ。人間の理論にして具体的であり現実的であろうと欲するならば、それは常に習慣の理論の上に立つのでなければならぬ。

悪癖という意味における習慣が総じて特定の個人に限られた行動様式を指すのに対し、一般的意味における習慣はまず多数の個人に共通な社会的な行動様式を意味する。習慣は一般的に且つ根本的に社会のものである。行動の秩序であり^{かまち}枠であるその様式は人間が自己のために作り出すものでなく彼が生まれ来たった社会から与えられるものであり学ぶものである。「旅をするために私用の道路を作る精力や富を持つ人はほとんどないであろう。彼らは既に出来上がっている道路を使用する方が便利でもあり『自然』でもあると考える。」社会は何時^{いつ}もある習慣のシステムを用意していて、自己の内部に生まれるすべての人間にこれを強制し、生まれた人間はこれを採用することによって生きることが出来る。その意識すると否とは無関係に、人間が社会のうちに成長するという事実は、彼がそこに支配する習慣のシステムを身につけることを現わしている。アリストテレスの「全体八部分二先行ス」という言葉は個人に対する社会の先行を主張する説の根拠として用いられ、これと反対にフーゴー・グロチウスの「部分八全体ヨリ老イタリ」という言葉は社会に対する個人の先行を確信する人々の武器となっているが、このような社会的全体の見地と個人の見地との対立に就いて^{いさ}毫も触れることなく、単に疑い得ざる事実として承認せねばならぬのは、人間が社会の外部に生まれることが不可能であるという一事である。人間は社会の内部に生まれ、それによって生きることが出来るものである。人間は自己がよって^{もつ}以て環境に適応し環境との間のバランスの確立に進み得る行動様式を自己に先立って存在する社会から学ぶ。人間は「習慣の束」であると述べたが、その習慣は社会があらかじめそこに生まれるもののために用意していたものであるとすれば、人間は社会によって作られるものであると言わねばならぬ。習慣の統一体である人間は社会によって形作られたものでなければならぬ。ジャッドが人間を *society in miniature* と名づけているのも、タマスがパーソナリティに *subjective aspect of culture* という有名な規定を与えているのもこれによるものと考えられる。そしてここに人間は社会の子であると言われる真実の意味があるのでなければならぬ。

——清水幾太郎『社会的人間論』

問い 右の文章を要約しなさい(二〇〇字以内)。